

ロシアにおける街頭の言葉

——見世物小屋の呼びこみについて

坂 内 徳 明

1

古くからロシアの街路は言葉と喧噪とであふれていた。17世紀前半にホルスタイン公の使節団のひとりとしてロシアを訪れたアダム・オレアリウスは、ロシア人がのしりあいを好み、彼らの町の通りが粗野な言葉や罵倒にみちた場所であると書き残している。⁽¹⁾ またほぼ同じ頃、総主教ヨアキムはモスクワのクリスマス週間に見られる民衆の恥ずべき行為を禁止する文中で、「罪を恐れぬ男と女とも多数集まり、老若を問わず通りや横町を歩きまわり、自らが作りし狂おしく悪魔的な歌を口にし、あまたの忌わしき言葉を発して踊る、また創造神にはふさわしからぬ扮装をし、人間の姿を捨て、毛むくじゃらの悪魔の面を作る……」と記している。ここに述べられた民衆の風習は、今世紀まで続いたコリャダーと呼ばれる異教的な祭である。このように通りや広場は民衆の儀礼行為が行なわれる場であった。そしてさらにそれらの場所は、皇帝や貴族と民衆とをつなぐ場でもあった。中世ロシアの広場で発せられる叫び声が政令伝達的手段となる場合が多かったのはそのためである。かつて音声⁽²⁾が社会に対して持つ役割はきわめて大きかったのである。⁽³⁾

19世紀ロシアにおいて、グリャーニエと呼ばれる祭礼は通りや広場にくり出して行なわれた民衆の代表的な娯楽のひとつであった。グリャーニエとは、クリスマス週間や謝肉祭、復活祭などといった祭日や聖人の日に、人々が戸外を散策しながらさまざまな娯楽に興ずるもので、主に都市を中心に繰り広げられたロシア風縁日である。このグリャーニエには、さまざまな大道芸をはじめとして、板張りの見世物小屋^{ベラガ}の芝居、⁽⁴⁾ ラョークと呼ばれた覗きからくり、人形芝居ベトルーシカなどがつきものだった。⁽⁵⁾

ピョートル・ボガトゥイリョーフは「ユーモラスな定期市フォークロアにおける芸

術的手法」と題された論文の中で、そうしたグリャーニエにおいて耳にすることのできた言葉を「定期市フォークロア」と名付ける。そして彼はこのタームの中に、見世物小屋や回転木馬^{カルセーリ}の客寄せの言葉、覗きからくりの口上、ペトルーシカの科白、そして買い手を呼ぶ商人の売り声を含めている⁽⁶⁾。これらの市の言葉は、そのまま都市の広場や街路が生み出す雑踏の言葉としてとらえることができるだろう。後述するように、広場の言葉に関してはミハイル・バフチンの論考があり、ボガトゥイリョーフの論文もそれに大きな示唆を受けて書かれた。しかしながら、これまでのロシア・ソビエトの民俗学研究においては、広場の言葉を含む都市のフォークロアについて、いまだ十分な考察がなされているとは言い難い⁽⁷⁾。本稿では、ボガトゥイリョーフの言う定期市フォークロアの中から特に見世物小屋の呼びこみの言葉をとりあげて、それを紹介するとともにその性格について考えてみたい。

2

18世紀に生まれ、19世紀20年代以降のグリャーニエの場には不可欠のものとなった見世物小屋は19世紀ロシアの民衆生活を考える上で忘れることのできない娯楽施設である。この小屋には地上から少し高い所にバルコニーがあり、開演前や幕間に小屋の芸人や道化がここに姿を見せては芝居の内容の紹介や顔見せを行ない、あるいは、簡単な演劇を披露した。それとともにこのバルコニーからは、客寄せを目的としながらそれにとどまらず、滑稽な内容を持つ小話が洒落や地口にあふれた巧みな話芸によって語られていた。

この呼びこみをかねた小話をするのは「呼びこみじいさん」、「バルコニーじいさん」あるいは「バルコニーの喜劇役者^{コメディアン}」と呼ばれる連中であつた。またさらに彼らは、やはりグリャーニエには欠かせぬ娯楽であつた回転木馬への呼びこみも行なっていたことから、「回転木馬のじいさん」とも呼ばれていた。彼らの衣裳はきわめてロシア的で伝統に従った固定したものである。例えば、「灰色の亜麻でできたはおひげと口ひげはわざと乱雑にしられ、つぎのあたった灰色の上着^{カフタン}、古ぼけて丸い御者帽のわきには造花、足にはすねあてと草鞋をつけていた⁽⁸⁾」あるいは「草鞋と外套^{フルミヤーク}といったロシア百姓の服装、頭には大きなかつら、口とあごには梳亜麻のつけひげ、ふところには半シツフ⁽⁹⁾（1シツフは約1リットル）の酒びん⁽¹⁰⁾」といった恰好だった。

ロシアのグリャーニエに関する貴重な回想を残したアレクセイ・アレクセーエフ・ヤーコヴレフによれば、19世紀7,80年代に評判の高かつた呼びこみのじいさんには

次のような人々がいた。ペテルブルグの海軍省広場では「類いまれなる道化師で、生まれながらの弁士」であるブルセーンツォフ老人、またセールウイじいさん、モスクワの乙女が原ではかつてのオペラ歌手で時事諷刺ものが得意のブチャーギンなど。⁽¹¹⁾またのちに紹介するエヴグラーフとカザーンツェフも同じくペテルブルグの海軍省広場のグリャーニエに登場した。⁽¹²⁾4, 50年代に人気を集め、外国の芸人とはじめて対等な位置を占めたエゴール・ボムボフ。⁽¹³⁾さらにニージニイ・ノヴゴロド市におけるヤーコフ・マモーノフの活躍ぶりについては、シャリャーピンとゴリキイの有名な回想記によって知ることができる。⁽¹⁴⁾今なお名前の判明しているこれらの弁士の多くはかつての軍人であり、また職人や歌手だった者もいた。この現象が覗きからくりの講釈師の場合でも共通して見られたことは、大道芸人の帰属する社会的階層とその地位を考える上で参考になる。

見世物小屋の客寄せがどのように行なわれていたかについては、先のヤーコヴレフやシャリャーピン、またレーイフェルトやペロウソフらの記述によってある程度まで明らかになる。⁽¹⁵⁾しかしながらその一方で呼びこみの言葉そのものに関する資料はきわめて少ない。⁽¹⁶⁾民衆演劇に関する資料収集のためのプログラムを作成したボガトゥイリョーフは、特に見世物小屋に対して多くのスペースをさき、呼びこみの言葉についても言及しているが、彼の方針に合致するような採集例はごく少ないと言わねばならないのである。そのようなわずかな試みとしてあげることができるのは、ヴァシーリイ・ケリシーエフが採集したものと、アレクサンドル・レーイフェルトが彼の著書である『見世物小屋』(1922年)の中で紹介するものの2つであると思われる。⁽¹⁷⁾この中で特に前者は、採集の時と場所、および弁士の名前を明記している点、またテキスト全体として見ても、呼びこみの小話をフォークロアのテキストとして採集しようとする意図を持つ点で注目すべきものである。以下ではこのケリシーエフの手によって採集されたテキストを中心にして呼びこみの言葉を紹介していくことにする。⁽¹⁸⁾

3

ここで検討するテキストは、ヴァシーリイ・ケリシーエフが1871年の春にペテルブルグにおいて採録したものである。このケリシーエフは60年代前後にはゲールツェンやオガリョーフとも親交のあった人物であるが、その彼が最晩年とも言うべき時期に呼びこみの言葉をフォークロアとして採集するに到ったのは何故か。彼の動機と意図がどこにあったのかはわからない。⁽¹⁹⁾採集者の死後にテキストの草稿は彼の弟のア

レクサンドル・ケリシーエフの手に渡り、この弟によって『帝室自然科学・人類学・民族学愛好者協会 民族学部門紀要』第9号(1889年)に発表された。その際に原稿は内容に従って配置され、1から19までの番号とその各々への表題とが付けられた。また発表されたテキストにはアレクサンドルによって書かれた簡潔で要を得た前書きが添えられている。この前書きによれば、採集が行なわれた当時、ペテルブルグの海軍省広場では謝肉祭と復活祭にグリャーニエが開催されていた。このテキストは、その折に姿を見せていた2人の退役軍人イヴァン・エヴグラール・ホフとガヴリーラ・カザーンツェフから口述筆記したものである。ヴァシーリイはこうした客寄せの軽妙な言葉でペテルブルグだけでなくロシア各地で採集し、弁士の経歴その他の情報とともに完全な資料集として出版するつもりであったという⁽²⁰⁾。

ケリシーエフのテキストの第1番目のものは「本」と題されている。以下にその全文をあげる。

Вот что, милые друзья, я приехал из Москвы сюда, из гостинного двора — наниматься в повара; только не рябчиков жарить, а с рыжим по карманам шарить.

Вот моя книга раздвигает. В этой книге есть много чего, хотя не видно ничего. Тут есть диковинная птичка, не снигирь и не синичка, не петух, не воробей, не щегол, не соловей, — тут есть портрет жены моей. Вот я про нее расскажу и портрет вам покажу. От прелести-лести сяду я на этом месте.

Вы, господа, на меня глядите, а от рыжего карманы берегите.

さて、親愛なる友人がたよ。モスクワの百貨店から御当地へやって参ったこのおいら。コックに雇われんがためでさあ。だけどやまどりなんぞ焼きませんぜ、赤毛道化といっしょに懷中をさぐるためさ。

ここにおっぴろげたおいらの本。この本の中身はどっさりあるが、何ひとつわかりゃしない。ここに書いてあるのは世にも珍しい鳥。うそでもやまがらでも、鶏でもすずめでも、ひわでもナイチンゲールでもありゃしない。こいつはおいらのかみさんの似顔絵だい。かみさんのことを話してやろう。似顔絵を見せてやろう。齒の浮くようなべっぴんなので、おいらはここにすわるとしよう。

諸君、おいらから目をはなすなよ。だけど赤毛道化には懷中物を御用心。

(ケリシーエフ No. 1——以下では K1 のように略記)

厳密に言えば、呼びこみのじいさんは同じバルコニーで寸劇や曲芸を披露した小屋芸人や道化とは区別される。すなわちじいさんは身体の動きや小道具を使わずに、た

だ口をついて次々と飛び出す言葉のみを手段として群衆の関心と笑いを引きおこさなくてはならない。そのため、上にあげたテキストでもいたる所に押韻による言葉遊びが見られ（百貨店 двора とコック повара, 焼く жарить とさぐる шарить, 美貌 прелести とおせじ лести 等々）、それが呼びこみの言葉を一種の地口・口合に近いものとしている。これは他のテキストでも繰り返し見られる現象である。

もちろんバルコニー上でじいさんの滑稽な仕草や身ぶりが見られることもあった。また、じいさんが手にする小道具についてはアレクセーエフニャーコヴレフも次のように記している。「じいさんは手に何かを持ち、それを見せながらおかしい語りをはじめることがよくあったが、それは例えば、カリカチュア風に描かれた醜い女性の大きな似顔絵⁽²¹⁾だった」と。似顔絵の他には、メニューと称する紙切れ（レーフェルト No. 8——以下では Л 8）や時計（Л 3）、また県知事と称されたぼろ人形がじいさんの持ち物となる場合があった。⁽²²⁾

醜い女の似顔絵に象徴される妻に対する嘲笑というモチーフは、中世ロシア文学や呼びこみ以外のフォークロアにも見られるが、⁽²³⁾特に見世物小屋の客寄せの言葉として気にいられたものだった。それは自分の妻の「美貌」、あるいは彼女の「料理の名人ぶり」に対する諷刺として語られる。

У меня жена красавица. Под носом румянец, во всю щеку сопля. Как по Невскому прокатит, только грязь из под ног летит . . .

わたしの女房は美人だよ。鼻の下には紅さして、頬は一面鼻汁だらけ。ネーフスキイ通りを転がっていっちゃあ、足もとからは泥がはねあがる……

(К 3)

Жена моя солидна, за три версты видно. Стройная, высокая, с неделю ростом и два дни загнувши. Уж признаться сказать, как бывало в красный сарафан нарядится, да на Невский проспект покажется——даже извозчики ругаются, очень лошади пугаются. Как поклонится, так три фунта грязи отломится.

おれのかみさんは貫禄あって、3 露里（1 露里は約 1 キロメートル）向こうからわかるほど。均整とれて背が高く、背丈は 1 週間で、腰をまげたら 2 日の高さ。隠すことなく申しますが、かみさんが赤いサラファンで着飾って、ネーフスキイ通りに目見えしたら、御者の奴まで毒づいて、馬の奴はえらくおじけづきゃがる。おじぎなんぞをしようものならば、3 フント（1 フントは約 400 グラム）もの泥が落ちてくる始末だい。

(K 4)

上記のテキストに次のレーイフェルトのテキストとほぼ同じ表現が見出されることは、決まり文句の多いことを示している。

(醜い女性の似顔絵を見せながら)

А вот, ребята, смотрите:
Эта моей жены партрет
Только в рамку не вдет.
У меня жена красавица—
Увидят собаки—лаются,
А лошади в сторону кидаются.
Зовут ее Ирина,
Пухла, что твоя перина,
Под носом румянец,
А во всю щеку—сопля.

さあて、みなの人、ごらん下さいよ。

これがおいらの女房の似顔絵だ

ただし額縁にはいっちゃいない。

おいらの女房は美人ときてる

犬は女房を見たら吠えるし

馬はわきへと逃げ出す始末。

こいつの名前はイリーナで

おまえの羽根ぶとんみたいにふくらさ。

鼻の下には紅さして

頬は一面鼻汁だらけ。

(Л 4)

再びケリシーエフのテキストから、自分の妻を揶揄するもの。

У меня, голова, жена красавица. Глаза-то у ней по булавочке, а под носом две табачные лавочки. У ней, голова, рожа на мой лапоть похожа . . .

さてもみなさま、おいらの女房はべっぴんさん。目ときてはビンの頭で、鼻の下にはタバコ屋が2軒。こいつのつらは、みなさま、おいらのわらじそっくりでさあ
.....

(K 5)

ボガトゥイリョーフの手法分析に従えば、以上あげたものの中には撞着語法（例えば K 3 の鼻と頬の描写, K 4 の背丈の計量単位）, 語順転換（K 3 の「紅」と「鼻汁」）, 誇張法（K 5 の鼻の下(24)の描写）といった手法が見出される。そしてこうした手法はコルネイ・チュコーフスキイが子供の言葉とフォークロアの中に指摘した「ひっくり返し」перевертыш(25) としてとらえることも可能であろう。子供が無意識に生み出す表現と、呼びこみが意識的に用いる滑稽な表現との間には共通する部分があった。

弁士の妻の料理の腕前について語ったものとして、

・・・Мастерица печь пироги и корован, пекет всегда в сарае. Готовит в кухне, чтобы больше пухли, с начинкой, с телячьей овчинкой, с луком, с перцем, с селедочными головками, с яичной скорлупой, с собачьей требухой — во какой! С одного конца разорвало, по всей деревне раздалось. А есть только свинье удалось. Рыжий облизывается, верно попробовал・・・

……（うちの女房は）ピローグと丸パン焼きの名人。いつも納屋で焼いてござる。大きくふくれるようにと台所で用意する。あんこには子牛の羊皮とたまねぎと、こしょうとにしの頭、それに卵の殻と犬のはらわたをいれたから、一体どんな代物やら！ 一方のはしが破裂して、村中に鳴りわたる始末。食べおおせたのは豚だけさ。赤毛道化は舌なめずりをしているから、きっと食べたにちがいない……

(K 6)

呼びこみの小話には、昔話に見られるようなまとまった筋の展開は見られない。ただ部分そのものが滑稽で面白くありさえすればよいわけで、この K 6 でもピローグに関する表現のナンセンスそれ自体が人々の笑いを呼ぶ。それは、ある意味で自己完結的な滑稽であったと言える。

自分の妻とならんで笑いとはばす相手として好んで選ばれるのは、同僚である小屋の役者たち、中でも特に道化であった。バルコニー上で自分の傍に立つことの多い道化は、じいさんのライバルであり、この 2 人のやりとりは時として一種のダイアローグの形をとった。アレクサンドル・ケリシーエフはペテルブルグとモスクワの客寄せのちがいとして、後者ではつねに 2 人が登場することをあげている。(26) またアレクセーエフニャーコヴレフも、モスクワのノヴィーンスキイと乙女が原でのグリャーニエには 2 人の喜劇役者がバルコニーに姿を見せたと回想している。(27)

道化についてはすでに K 1 でも言及されていたが、見物人のポケットから金銭をかすめ取るきんちゃく切りとして描き出される場合が多かった。

．．．

Эй, рыжий, подходи ко мне поближе
 Поделись со мной, а я не скажу, что видал,
 Как ты в чужой карман залезал.

えい、道化やろう、もっとおいらの方へ寄れよ。

おいらといっしょに話をしよう。だけどおいらは言わないよ、

おまえがひとさまのポケットへ手をつっこむところを見たなんてこと。

(JI 5)

しかし道化をあざ笑うじいさん自身も道化と同類である。次のテキスト中で「謝肉祭を祝う」とあるのは、この祭日にグリャーニエが開催されることが多かったことを示す。シャリャーピンも回想の中で、呼びこみの弁士が「謝肉祭のじいさん」と呼ばれて⁽²⁸⁾いたことを記している。

Вот, господа, я к вам пришел, с масленицей вас проздравить да ваши карманы ошарить．．．

さあさあ、みなさん、ここに現われましたるこのわたし。謝肉祭を祝ってあげるため、そしてあなたがたの懐中をさぐるため……

(K 13)

じいさんはその科白の中でかつての自分の職業について言及する。それは例えば、仕立屋と商人 (K 8)、床屋 (K 17) や漁師 (K 18)、またはコック (Л 18) などであった。次にあげるのは「散髪屋」と題されたものの全文である。

Был я цирюльником на большой Московской дороге. Кого побрить, постричь, усы поправить, молодцом поставить, а нет, так и совсем без головы оставить. Кого я ни бривал, тот дома никогда не бывал. Эту цирюльню мне запретили.

おいらモスクワの街道ぞいで散髪屋をやっていた。誰でも顔を剃ってやり、髪を刈り、口髭を整えちゃあいい男にしてやったかという、いいや、とんでもない、すんでのところで首がなくなろうっていう次第。おいらが顔を剃ってやった奴は誰でも、二度と家には戻れない。そこでおいらの散髪屋は店じまいってわけさ。

(K 17)

ここには、メタフォアの手法によって追はぎとしてのじいさんが表現されている。⁽²⁹⁾さらに、そうしたじいさんが警察を諷刺するものとしては次にあげる「風呂屋」と題

されたものがある。ここで風呂屋とは警察署を意味している。

Я по Невскому шол, четвертака искал, да в чужом кармане рубль нашел, едва и сам ушел. Потом иду да подумываю.

Вдруг навернулся купец знакомый да нездоровый, только очень толсто-рожий. Я спросил: Дядюшка, в которой стороне деревня? А он мне сказал: у нас деревни нет, а все лес. А я к нему в карман и влез. Он меня взял да в баню и пригласил. А я этого дела не раскусил: я на доровщинку и сам не свой.

Приходим мы в баню. Баня-то баня-высокая. У ворот стоит два часовых в медных шапках. Как я в баню-то вошел, да глазом-то окинул, то небо и увидел. Ни полка, ни потолка, только скамейка одна. Есть полук, на котором черт орехи толоч. Вот, голова, привели двоих парильщиков, да четверых держальщиков. Как положили меня дружка не на лавочку, а на скамеечку, как начали парить с обеих сторон гладить. Вот тут я вертелся, вертелся, вертелся, насилу согрелся. Не сдержал, караул закричал. Баныщик то добрый, денег не просит, охапками веники так и носит.

Как с этой бани сорвался, у ворот с часовым подрался.

あっしがネーフスキイ通りを歩いていて、4分の1ルーブリを探していたら、ひとさまのポケットに1ルーブルを見つけたのさ。すんでのところでかっぱらうところ。あっしは歩いて、あれやこれやと考える。

ふとふりむいた商人は見覚えのあるやつで、病気持ちだがずいぶんと太ったやつだった。あっしはたずねた、村はどの方角だい？するとやつは言った、ここいらには村はなくて、一面が森さ。あっしはポケットに手をすべりこまず。やつはあっしをつかまえちゃあ、風呂屋へと御招待。だけどあっしにはそれがのみこめない。ちょいともらいものをしてただけだし、気も動転しているから。

あっしらは風呂屋へとやって来る。風呂屋は高い建物で、門の所に銅の帽子の番兵が2人立っている。風呂屋へは行って、ながめまわすと、空が目にはいる。床も天井もなく、ただベンチがひとつあるだけ。腰掛があって、その上では悪魔がくるみを割ったんだ。三助が2人、監督が4人連れて来られた。2人の介添人があっしを椅子でなくベンチにすわらせるや、両側から蒸気を浴びせてプレスをはじめる。そこであっしはぐるぐるまわされ、むりやりに暖められた。あっしはがまんしきれず、見張りはさげんだ。風呂番はいいやつで、金もせびらず、一抱えもの枝箒を運んで来た。

この風呂屋をおん出る時にゃ、門の所にいた番兵といっしょに一目散。

(K 10)

警察署を風呂屋として表現するメタフォアの手法は、同じく「風呂屋」の表題を持つ K 11 にも見られるが、そこでは懐中物を盗まれたじいさんが、やはり警察で厳しい取調べを受けて逃げ出したと語られる。またじいさんの諷刺が警官に対して向けられることもある。

А еще, робята, что я вам скажу:
 Гулял по Невскому прищепту
 И ругнулся по «русскому диалекту».
 Ан тут как тут передо мной хожалый:
 В фартал, говорит, пожалуй!
 За што ж? говорю…А не ругайся!—
 Вот за то и в часть отправляйся!
 Хорошо еще, что у меня в кармане рупь-целковый случился,
 Так я по дороге в фартал оскупился.
 Так вот робята—на Невском прищепте
 Не растабарывайте на «русском диалекте».
 Так то!

さあさあ、みなさん、話してあげよう。
 あっしがネーフスキイ通りを歩きながら
 「ロシアなまり」でどなっていると、
 あっしの目の前に警官が現われて言った、警察署へ行こう！
 あっしは言った、何のため？……どなっちゃなん！
 だから署まで来いっていうんだ！
 ポケットの中にルーブルがはいっていちなおさらだ
 そこであっしは警察までの道すがら、袖の下をやって逃げたのさ。
 さあて、みなさん、これはネーフスキイ通りでおこったこと。
 「ロシアなまり」で話しちゃなりません。
 いや、まったくのところ！

(Л 6)

ケリシーエフのテキストの第 15 番は「道行く人」と題されている。最初に、この旅人が赤毛道化に似ていることが語られたあと、じいさんとの出会いについて述べられる。まず第 1 の出会いはキリスト降誕祭の時で、その時に彼はじいさんに、キリストを讃美するように、それとともに他人の家にしのびこむようにと言う。次の出会い

は復活祭の日で、その日の晩禱の際に司祭が「キリストはよみがえり給うた」と言うと、彼は商人のポケットへ手をいれたと語られている。民衆の祭の時に外部からやってくる異人としての旅人とじいさんとの出会いが、キリストと泥棒という対比によって描かれている点はきわめて興味深い。しかも以下で見るように、この旅人が職人であることも広く放浪民全体を考える上で参考になるだろう。なお、針を持つ仕立屋のイメージが辻強盗を連想させるメタフォアは K 8 にも見られるものである。ここにあげる K 15 でも、にれの針とは棍棒のことであり、それを手にして立つとは辻強盗をはたらくという意味である。

・ ・ ・ Он, голова, хороший мастеровой: кузнец, слесарь, токарь, столяр, а еще плотник, по чужим карманам лазить охотник. Еще, голова, литейщик, башмачник, сапожник, портной—только он, голова, за Московской заставой с вязовой иглой стоял. Раз, голова, стегнул, енотовую шубу сразу и махнул.

……やつは、みなさん、すばらしい職人でござい。鍛冶屋で金物工、旋盤工で指物師、その上に大工で、他人のふところに手をいれるのがたまらなく好きなやつさ。おまけに、みなさん、やつは鋳物師で編上靴の職人、長靴職人で仕立屋でござい。けれど昔は、みなさん、やつはモスクワ閨門のむこうでにれの針を手にして立っていたのさ。ひとむち打ったら、みなさん、あらいぐまの外套なんぞをすぐさまいたください。

(K 15)

小屋の前に立って呼びこみを聞いていた群衆はどのような人々からなっていたか。それを考える上でひとつの参考になるのが、上のテキスト中で列挙された職人の名前である。街頭をうろつく人々は自分の職業の名を耳にすることで、おそらくはただちに小屋のバルコニーへと目を向けたであろう。弁士はそうした効果を十分に考慮した上で、この言わば職人づくしを語った。つまり、テキスト中の職人名が小屋の前に立つ聴衆の社会的階層を反映していたと考えてよいだろう。そしてこのことは、数多くの職業を経験した呼びこみ弁士自身の都市下層民としての性格とも無縁ではなかった。

呼びこみによって語られるのが都市民衆の世界であることを示すのは、上の職人名の列挙や辻強盗に関する言及だけではない。呼びこみの言葉に頻繁に登場する通りや広場などの名称（ネーフスキイ通り、セーンナヤ広場、オブーホフ橋、ナルヴァ門など）、ならびに農村では耳にしにくかった語彙（マカロニ、スープ、コーヒー、メニュー、マドモアゼルなど）もまた、呼びこみの言葉が都市の世界を描写していること

を教⁽³⁰⁾えている。さらには、「富くじ」を話題として、その当たりくじの景品を次々と紹介していくものがいくつか見られること（K 13, K 14, Л 3）も都市という背景なしには考えられない。ヤーコヴレフによれば、1870年代には慈善を目的とするくじが⁽³¹⁾広まり、グリャーニエの場にもはいりこんでいたという。一例をあげる。

Вот, ребята, разыгрывается у меня латарея :

Хвост да два филея

Чайник без ручки, без дна

Только крыша одна—

Настоящий китайский фарфор,

Был выкинут на двор,

А я подобрал, да так разумею,

Что можно фарфор разыграть в латарею,

Часы на 13 камнях,

Что возят на дровнях, . . .

さあさあ、諸君、おいらには当たりくじ。

婦人用襟巻と刺繍糸2本（хвостには尾、филейにはヒレ肉・魚肉の意味がある）。

取っ手も底もないティーポット

ただふただけはある。

真正銘の中国ものの陶磁器だ

庭にすてられてあったのを

おいらはひろって、そこでわかった

陶磁器を富くじの当たりにできるってこと

それに荷ぞりで運ぶ

13 石の時計さ……

（Л 3）

さらに景品を列挙する中の一節として、

. . . Серьги золотые, у Берта на заводе из меди литые, безо всякого подмеса, девять пудов весу . . .

……黄金の指輪だぞ、ベルトの工場で銅から鑄造された。しかもわざわざあつらえたもの、重さはなんと9ブード（1ブードは約16キログラム）もある……

（К 14）

じいさんの言葉が眼前に群がる人々に対して向けられることも、当然のことながら、

多かった。例えばシャリヤービンの回想によると、弁士のマモーノフが小屋の前の人人に向かって、「えい、みなの人、頭のからっぽな連中ども。おれたちのところへ来い、みやげをやるぞ」と叫んだ⁽³²⁾という。さらにペリーンスキイは、バルコニーの上と下とのやりとりを含む場面を次のように記している。

……道化師の洒落は、まるで火打石の火花のようにまき散らされる。みんなは腹の底から大笑いする。群衆の中にタートル人が見えた。すると道化は彼に向かって叫ぶ、「よお、よお、大将、待ちなよ。おまえの巻き毛をちりちりにしてやるぜ（巻き毛 пукли とちりちりにする припеку とをかけてある）」と。天と地は洪笑でうちふるえる⁽³³⁾……

このような弁士と聴衆とのつながりは、呼びこみの言葉にも反映している。例えばテキストの中に、目にした娘のことをそのまま話題にする場合（Л 5）や群衆に問いかける場合（К 12）が見出されることはそれを示している。また、観客に対する呼びかけの言葉が量的にも種類の上でも豊富なこと（господа, голова, милые друзья, братцы など）も、弁士と聴衆との結びつきを示している。そしてこのことを象徴するかにように、ケリシーエフのテキストの最後は「聴衆」と題されている。その後半部をあげる。

・ ・ ・ Господа, вам фокус покажу: что вы дадите, я в свой карман положу.

Вот что я, вам, господа, скажу. У меня сегодня несчастье случилось, в пустой корзинке кошка утопилась. Осталось семеро котят на молочко-то, господа, давайте сюда.

А я вот что, господа, скажу: пряники да орех кидать великий грех. Лучше отдохните, да копеек по шести мне махните.

Дай тебе Бог полную пазуху блох, четверть вшей, огород чертей. Нова хата провались, а старая загорись.

……諸君、あなたがたに手品をお見せしよう。あなたがたがくれたものを、わたくしがポケットにしまうってやつだ。

さあて、諸君、あなたがたに申し上げよう。今日わたくしにはつらいことがあった、猫が空っぽのかごの中で溺れちゃったんだ。ミルクのいる子猫が7匹残されちゃった。そこで諸君、ここにお金をいれておくれ。

さあて、またまた諸君、申し上げよう。糖蜜菓子とくるみを捨てるなんて大変な罪だ。十分に休んでわたくしに6コペイカずつ投げてくれたほうがよいぜ。

願わくば、あなたのふところがのみとしらみで、畑が悪魔でいっぱいになります

ように。新しい小屋はくずれ、古いやつは燃えちまえ。

(K 19)

あるいは、弁士の言葉の最後をしめくくるものとして次のようなものもある。金を集め終わったじいさんが、バルコニーの手すりをすべり降り、その場をあとにしなから観客におじぎをして言う。

Пока до свиданья !

Вам то забавно, а у меня в глотке пересохло !

Эх-ма! С кого бы получить,

Чтобы деду глотку промочить.

じゃあ、さようなら！

あなたがたにはお楽しみ、だけどおいらの喉はからからだい！

ええい、よう！　じいさんの喉をうるおすために、

どなたか御報謝！

(Л 9)

4

アレクサンドル・ケリシーエフによれば、客寄せの小話は口承文学作品が持っているあらゆる特徴をそなえているという。⁽³⁴⁾このことをきわめて分析的な形で明らかにしたのが、最初にあげたボガトイリョーフの論文である。すなわち彼は、呼びこみの言葉を含む定期市フォークロアの詩的手法の指摘を通して、呼びこみの言葉が民話の地口、民衆劇や人形劇の科白、さらには17世紀のロシアの諷刺文学と共通の手法を持つことを明らかにしたのである。⁽³⁵⁾呼びこみのフォークロアは民衆の中に存在していた洒落や地口などの言葉遊びを取りいれ、彼らの間に広まっていた話題や話のモチーフを織りこみながら伝承されていった。

しかしながら、それと同時にこのフォークロアには他の口承文芸と大きく異なる点が存在する。それはこのフォークロアが、目の前を通り過ぎる不特定多数の人々を相手とし、彼らの関心をひきつけることを目的としていたという点である。これに関してアレクサンドル・ケリシーエフは次のように記している、「ぶらぶらと遊歩する群衆の注目がほんのつかの間のものであり、それに加えて寒さや騒音の中にあって大声でしゃべることがたやすいことではないために、じいさんは簡単明瞭に語らざるをえず、⁽³⁶⁾そのことが彼らのおどけの言葉に大きな力を与えている」と。この引用が明らか

にしているように、呼びこみの弁士はただ彼の口から発せられる言葉のみを武器として人々の中に笑いをひきおこした。ニージニイ・ノーヴゴロドの呼びこみじいさんであったマモーノフは、「通りや広場に活気を与える、野暮で荒っぽい機知」と「辛辣なジョーク、観客に対する大胆な洒落、とどろくようなつぶれたしゃがれ声」を身につけていたという。⁽³⁷⁾ 小屋の呼びこみのじいさんは手品師でも曲芸師でもなく、「話術ジャンルの芸術家」であり、「小屋芝居の特異な司会者」^{コンファランタン}だった。その意味で、「小屋芝居はすでに通りで始まっていた」⁽³⁸⁾と言える。

ところで、客寄せの言葉が生み出す笑いとはどのような性格を持っていたか。まず、弁士の滑稽な科白が誰を笑う材料とするものだったかをふりかえてみれば、それは彼の妻、同僚である道化、警官、また小屋の前の観客、さらには彼自身などであった。弁士の言葉によって表現された笑う者と笑われる者との関係は、非常に自由で打ち解けたものだった。この意味では呼びこみの言葉は、バフチーンが民衆的な笑いの文化の基本的な形式のひとつとしてあげた「無遠慮で粗野な広場の言葉」⁽³⁹⁾としてとらえることができるかもしれない。事実、ボガトゥイリョーフは、定期市フォークロアの手法分析を行なったのちに、ロシアのグリャーニエにおける笑いの言葉を、バフチーンがラブレーの作品を通して描き出したカーニバル的広場の言葉に重ね合わせるの⁽⁴⁰⁾である。

しかしながら、呼びこみの言葉によって表現された笑いの関係をより具体的に考えるならば、そこにはバフチーンの言う「広場の言葉」には必ずしもあてはまらない部分を見出すことができると思われる。それについて考える上で参考になるのは、呼びこみの言葉について直接論じているわけではないが、中世のロシアの笑いの文化⁽⁴¹⁾に関するドミートリイ・リハチョーフの論考である。

リハチョーフは、民衆の祝祭的笑いの重要な特質は笑いが笑う者自身に対しても向けられる点にあるとするバフチーン⁽⁴²⁾の指摘を出発点として、これまでのソビエトの中世文学研究による「諷刺論」とは異なる角度から中世文学の読みかえを行なう。すなわち彼は、中世ロシアの文学作品が織りなす笑いの世界を「ひっくり返し」「馬鹿らしさ」「裸の創意性」「衣服の裏返し」「道化」などの特質によってとらえることを通して、中世の笑いの世界全体を「反文化」⁽⁴³⁾の世界として提示するのである。

バフチーンのカーニバル論とリハチョーフの笑いの世界とを結びつける重要な要素は「ひっくり返し」「逆転」のイメージである。なぜならば、この「逆転」のイメージ⁽⁴⁴⁾こそが、バフチーンの言うカーニバル的な祝祭空間を生み出し、リハチョーフの述べる「反文化」世界を作り出したからである。

しかしながら、呼びこみの言葉には「ひっくり返し」「逆転」にいたるまでの力ではなかった。このフォークロアに表現される人間関係あるいは言葉そのものには笑いと滑稽とがみちあふれていたにもかかわらず、変性や破壊といった強烈なイメージは残らなかった。そこには、ラブレーの作品中に見出されるスカトロロジーに関連した語彙、または中世ロシア文学における衣服の剝奪に関する描写が存在しない。客寄せの言葉の笑いは相手を揶揄し嘲笑するものであったとは言え、その相手を完全に罵倒し圧倒し尽すまでには到らなかったのである。最終的には、呼びこみの言葉は通りや広場の群衆を客として呼びいれなくてはならぬという商業的条件によって制約を受けていた。その意味でこの笑いのフォークロアは、日常的な枠から外に出ることはありえなかった。カーニバルの、いかなる制約からものがれた悪態や罵倒の言葉が日常の関係をこわし、自由な新しい世界を生むとすれば、呼びこみの言葉は「⁽⁴⁵⁾おこ」の言葉とはなりえなかったのである。

開かれた空間である街路と広場とに向かって披露された芸と言葉が、時に小屋内での芝居よりも面白いものであったということは、街路と広場のみが持つ大きな力の存在を示している。プーシキンはこの力を端的に、「ドラマは広場で生まれ、民衆の娯楽を形作つた⁽⁴⁶⁾」と表現した。バルコニーからの呼びこみをかねた滑稽な語りは、都市生活者の人間関係や社会関係を背景として生まれた都市のフォークロアである。また、この言葉は不特定多数の観衆を相手にし、彼らの関心を自分に集める辻芸としての性格を持った街路のフォークロアであった。このフォークロアは街頭や広場にあらわれた「民衆生活史」の一樣相として検討されなければならないであろう。

注

1. Олсрий, 1906: 186 さらに Нечаева, б. г.: 59-60 も参考になる。
2. Снегирев, 1837: 37-8
3. Черепнин, 1959: 342 を参照。さらに Нечаева, 69
4. Бахтин, 1965: 197 また柳田国男の提唱する「新色音論」(柳田, 1931: 157) を参照。
5. Грляер-Ниеに関しては Алексеев-Яковлев, 1948; Забелин, 1873; 中村, 1979
6. Богатырев, 1968 ロシアでは定期市がクリスマス週間や謝肉祭、復活祭とならぶ重要な祝祭であったことを忘れてはならない。そしてこのことがボガトツイリョーフに「定期市フォークロア」というタームを作らせた理由でもある。しかし「定期市フォークロア」に含まれるものすべてが現実の定期市場で見出されるわけではない。このタームの妥当性に関しては問題が残る。
7. 特に物売りの言葉に関しては、今世紀10—20年代に収集されたアルヒーフが最近公刊さ

- れた (Симаков, 1978) ことに注目したい。また都市のフォークロアについては Рабинович, 1978; Островский, 1974; Его же, 1977
8. Алексеев-Яковлев, 62
 9. Его же, 63 さらに стр. 61 の絵を参照。
 10. Кельснев, 1889: 113
 11. Алексеев-Яковлев, 63-4
 12. Кельснев, 1889: 113
 13. Дмитриев, 1977: 122
 14. Шаляпин, 1917: 42-3; Горький, 1935: 118
 15. 14. の文献の他に Лейферт, 1922; Белоусов, 1929
 16. ニーजीニ・ノーヴゴロド定期市の見世物小屋に対する 冷淡な反応 (Зубов, 1839: 40-42; Погодин, 1841: 296) を参照。特に後者のボゴージンは小屋のバルコニーから聞こえてくる声を獣のものだと記している。それに反して貴重な観察は Белинский, 1953: 350 に見出すことができる。また Ф. В. ブルガーリンは 1850 年代に呼びこみの言葉を書き残している (Дмитриев, 1977: 121)。
 17. Богатырев, 1923: 111
 18. ロシア民衆演劇に関するすぐれたアンソロジーである Берков, 1953 には, ケリシーエフの 19 個のテキストから 9 個, またレーイフェルトからは 9 個全部が収録されている (Берков, 129-136)。ちなみに現在まで, この呼びこみについてはジャンルとしての明確な定義づけは行なわれていない。それ故にこのフォークロアの名称もあまりはっきりしていない。例えば, приговор (Савушкина, 1976; Богатырев, 1923), 特にケリシーエフが用いた прибаутка (Берков, 1953 もそれを受けいれている) 等。この прибаутка には「地口」「洒落」「語呂あわせ」の他に, 「短く, 滑稽な話」「アネクドート」の意味もある (ダーリ『詳解大ロシア語辞典』)。
 19. Кельснев, 1867 に付けられた М.クレヴェンスキイの序文には, ケリシーエフの収集に関する言及は見られない。
 20. Кельснев, 1889: 113
 21. Алексеев-Яковлев, 63
 22. Шаляпин, 42
 23. Богатырев, 1968: 454; Лихачев и Панченко, 1976: 31
 24. Богатырев, 1968: 453-463
 25. Чуковский, 1970: гл. 4
 26. Кельснев, 1889: 113
 27. Алексеев-Яковлев, 66 すでに述べたとおり, 厳密に言えば道化と呼びこみの弁士とは区別される。道化 паяц, клоун, рыжий は外国起源のビエロであり, 名前と白い衣裳, 化粧した顔のみがその外国起源をとどめている。これに対し呼びこみじいさんは, 「面と向かってありのままをしゃべる」大胆な皮肉屋であり, ロシア固有の芸人であったという (Дмитриев, 1977: 119-20)。こうした指摘は, 呼びこみじいさんを中世ロシアの放浪芸人であるス

- コモロフの伝統の継承者としてとらえようとする考え方と結びつくであろう (Кельсиев, 1889: 113; Дмитриев, 1977: 120; Савушкина, 1976: 122-3)。
28. Шаляпин, 42
 29. Богатырев, 1968: 462
 30. Там же, 465-6
 31. Алексеев-Яковлев, 63
 32. Шаляпин, 42
 33. Белинский, 350
 34. Кельсиев, 1889: 113
 35. Богатырев, 1968 ただし手法分析の方法それ自体はすでに Богатырев, 1923 において提示されている。
 36. Кельсиев, 1889: 113
 37. Шаляпин, 43
 38. Дмитриев, 1953: 34, 31
 39. Бахтин, 7
 40. Богатырев, 1968: 471 ほぼ同様の視点は Савушкина, 130 にも見られる。ロシアのグリャーニエを「カーニバル的祝祭」としてとらえることができるかどうかに関してはより具体的な検討が必要である。ボガトゥイリョーフのこの論文はきわめて注目すべき労作だが、手法分析とカーニバル論の展開の間にはいささかの飛躍があるように思われる。
 41. リハチョーフは呼びこみの言葉を中世文学の笑いの言葉の延長上に置いている (Лихачев и Панченко, 31-2 また Богатырев, 1968 もそうした考えに立つように思われる) が、このような通時的問題に対しては放浪芸人スコモロフの系譜をも含めた幅広い笑いの文化の考察が不可欠となろう。さしあたり、笑いの語り言葉 *раешный стих* の伝統に関しては Шептаев, 1948; Лихачев, 1954 を参照。
 42. Бахтин, 15
 43. Лихачев, 1973; Лихачев и Панченко, 1976
 44. 「逆転」のイメージについては Vabcock, 1978
 45. 山本, 1968: 26 さらに柳田, 1947 を参照。
 46. Пушкин, 1830: 147

参考文献

- Алексеев-Яковлев, А. Я.
 1948 Русские народные гулянья. По рассказам А. Я. Алексеева-Яковлева. В записи и обработке Е. Кузнецова. Л.-М.
- Бахтин, М. М.
 1965 Творчество Франсуа Рабле и народная культура средневековья и Ренессанса. М. (『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳)

せりか書房)

Белинский, В. Г.

1953 Полное собрание сочинений, т. I. М.

Белоусов, И. А.

1929 Ушедшая Москва. В кн.: Ушедшая Москва. Воспоминания современников о Москве второй половины 19 века. М.

Берков, П. Н.

1953 Русская народная драма 18–19 веков. М.

Богатырев, П. Г.

1923 Чешский кукольный и русский народный театр. Берлин-Пг.

1968 Художественные средства в юмористическом ярмарочном фольклоре. В его кн.: Вопросы теории народного искусства. М., 1971.

Веселовский, А. Н.

1898 Психологический параллелизм и его формы в отражениях поэтического стиля. В его кн.: Историческая поэтика. Л., 1940.

Гациский, А. С.

1875 Нижегородка. Путеводитель и указатель по Нижнему Новгороду и по Нижегородской ярмарке. Нижний Новгород.

Горький, М.

1935 О литературе. М.

Дмитриев, Ю. А.

1953 Русский цирк. М.

1977 Цирк в России. От истоков до 1917 года. М.

Забелин, И. Е.

1873 Хроника общественной жизни в Москве с половины 18 ст. В его кн.: Опыты изучения русских древностей и истории, ч. 2. М.

Зубов, А.

1839 Описание нижегородской ярмонки. СПб.

Кельсиев, В. И.

1867 Исповедь. В кн.: Литературное наследство, т. 41–42. М., 1941.

1889 Петербургские балаганные прибаутки. «Труды Этнографического отделения Императорского Общества Любителей естествознания, антропологии и этнографии» кн. 9. М.

Лейферт, А. В.

1922 Балаганы. Пг.

Лихачев, Д. С.

1954 Социальные основы стиля Моления Даниила Заточника. «ТОДРЛ», т. 10. М.-Л.

1973 Древнерусский смех. В сб.: Проблемы поэтики и истории литературы. Саратов.

Лихачев, Д. С. и Панченко, А. М.

1976 «Смеховой мир» древней Руси. Л.

Лотман, Ю. М. и Успенский, Б. А.

- 1977 Новые аспекты изучения культуры древней Руси. «Вопросы литературы» 3.
- Нечаева, В. В.
б. г. Уличная жизнь Москвы 16–17 вв. В сб.: Москва в ее прошлом и настоящем, ч. 2–1. М.
- Олеарий, А.
1906 Описание путешествия в Московию и через Московию в Персию и обратно. СПб.
- Островский, Г. С.
1974 О природе русского изобразительного фольклора. «Советская этнография» 1.
1977 Сценография фольклорного театра. «СЭ» 2.
- Погодин, М. П.
1841 Нижний. Дорожные записки. «Москвитянин» ч. 5.
- Пушкин, А. С.
1830 О народной драме и драме “Марфа Посадница”. Полное собрание сочинений в 10-ти томах. Изд. 4-ое, т. 7. Л., 1978.
- Рабинович, М. Г.
1978 Очерки этнографии русского феодального города. М.
- Савушкина, Н. И.
1976 Русский народный театр. М.
- Симаков, В. И.
1978 Красноречие русского торжка. В сб.: Из истории русской фольклористики. Л.
- Снегирев, И. М.
1838 Русские простонародные праздники и суеверные обряды, вып. 2. М.
- Черепнин, Л. В. / ред. /
1959 Памятники русского права, вып. 5. М.
- Чуковский, К. И.
1970 От двух до пяти. М. (『2歳から5歳まで』樹下節訳 理論社)
- Шалапин, Ф. И.
1917 Страницы из моей жизни. В кн.: Федор Иванович Шалапин в двух томах, т. 1. 1957.
- Шептаев, Л. С.
1949 Русский раешник 18 века. «Ученые записки Ленинградского Государственного Института им. А. И. Герцена» т. 87. Л.
- Якобсон, Р. О.
1921 Новейшая русская поэзия. Прага. (『最も新しいロシアの詩』北岡誠司訳『ロシア・フォルマリズム文学論集 1』せりか書房)
- Babcock, B. A. ed.
1978 The Reversible World. Symbolic Inversion in Art and Society. Cornell UP., Ithaca and London.
- Day, Mahlon
1977 New York Street Cries in Rhyme. Dover Publications, New York.
- 江川 卓

1977 「古代からの挑発—《Смеховой мир》 древней Руси をめぐる対話—」『現代ロシア語』8月号

ギロー P.

1979 『言葉遊び』 中村栄子訳 白水社 クセジュ文庫

今 和次郎

1927 「露店大道商人の人寄せ人だかり」『今和次郎集 第1巻 考現学』ドメス出版 1971

桑野 隆

1977 「大道芸とアヴァンギャルド」『未来』126

中村 喜和

1979 「ロシアの縁日」ロシア・フォークロア談話会会報『なろうど』1

小沢 昭一

1976 『私は河原乞食・考』 文芸春秋 文春文庫

リッベリーノ A.

1971 『マヤコフスキーとロシア・アヴァンギャルド演劇』 小平武訳 河出書房新社

ルドフスキー B.

1973 『人間のための街路』 平良敬一他訳 鹿島出版会

鈴木 栄三

1959 『ことば遊び辞典』 東京堂

1975 『ことば遊び』 中央公論社 中公新書

山本 吉左右

1968 「義経記おぼえがき」 和光大学人文学部紀要3

柳田 国男

1928 「笑の文学の起源」(『定本柳田国男集』第7巻 筑摩書房)

1931 「明治大正史 世相篇」(『定本柳田国男集』第24巻 筑摩書房)

1947 「鳴濤の文学」(『定本柳田国男集』第7巻 筑摩書房)